

# ともしび

6 月 号

## 仏智不思議の誓願

小 川 一 乗  
(天谷大学名誉教授)

はじめに

皆さま、こんばんは。今年も親鸞聖人讃仰講演会にご縁をいただき恐縮いたしております。本日は「仏智不思議の誓願」という講題で、お話ししたいと思います。私が申し上げるまでもなく、積尊の出家の動機は、人間が生老病死に苦悩することにあります。これは人間だけの根源的な問題です。なぜ人間は生老病死に苦悩するのか——。そういう問題をもって出家されたのが積尊であると言えます。

生まれた限りは、年を取り、病気にもなり、死んでいかなければならないということを、なかなか受け入れることができません。老病死を遠くに追いやって生きようと頑張っているのが人間です。現在でも、社会をリードしておられる知識人の先生方は、生老病死の中の生老病をよく問題にしています。よく「生きる力」ということが言われていますが、年を取ること、病気をすることも、生きることの中に含まれますので、「生きる力」でそれらを克服しようとするのです。

先般、『文藝春秋』(二〇一八年十二月号)を手に取ると、「孤独」のすゝめ」という特集があり、「孤独であることの幸福論」とも言える五木寛之氏の論述が目にとまりました。そこには、年を取ってきたら孤独になります。その孤独をマイナス思考で受け取らないで、プラス思考で孤独とはいいいものだと積極的に引き受けて生きようという内容が述べられています。これも、やはり「生きる力」を問題にしているわけです。

一方で、金子大榮先生の詩には、次のような言葉がございます。

孤独の淋しさに万人の悩みを思ふ

(金子大榮「宗祖を想ふ」『くずか』二文栄堂、一九七八年、四三頁)

「孤独の淋しさ」ということは、年を取るだけではなく、命を終えていくということも含まれます。金子先生は「万人」と言われます。孤独はいいものだと言えるお方は別として、多くの人びとは、孤独の淋しさに苦しむ

悩みます。そういう現実を金子先生はおっしゃっていると 생각합니다。そうした言葉が、万人の一人としての私の胸にジワッと響いてきます。

### 「死ぬ力」を課題とする仏教

この世をどう生きるかという「生きる力」が、どうも基本になっているのが現代でして、自分の死と向き合うことが、昔の人より現代の人はできなくなっている面があるのではないかと思います。

科学的知識を大切にして生きているのが現代社会であり、現代人です。すると、自分が命を終えていくことはどうなるのでしょうか。科学的に言ってしまうと、土葬されれば土に返るだけということになり、火葬されれば灰と煙になるということになります。それ以上のことは科学的知識では分かりません。科学的知識では、死後のことだけでなく、明日のことも明日になってみなければ分からないのです。そうであれば、分からないから考えても仕方ない、ということになります。およそそうしたところで、自分の死を見つめるということがなくなってきたのが現代ではないでしょうか。私は、自分の死を見つめる力、すなわち「死ぬ力」が問われない時代に、現代がなっているのではないかと思うのです。

ところが、人間は困ったもので、そう言いながら、金子みすゞさんの詩にある「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものもあるんだよ」「星とたんぽぽ」というような言葉を聞くとドキッとします。科学的知識を大切にしている、このように科学的知識の弱点がズバッと突かれると戸惑ってしまうわけです。そうすると今度は、見えないものは何でもある、となってしまうのです。科学的知識に立ちながら、さまざまな非科学的なものを受け入れているのが現代であるとも言えます。

昔からこのように「死ぬ力」がなかったわけではありません。たとえば日本の場合には、死後を霊の世界として受け取ってきたということがあります。現に浄土真宗以外の仏教では、先祖の霊を祀る、霊に守ってもらうということが法事の大切な意味です。だから怨霊ということが、古くから大変問題になっていきます。こうした感覚を、日本人の多くがもっています。日本人特有と言っているかもしれない。また、キリスト教では、命終えれば最後の審判をへて神の国である天国に召されるのだと考えるのが基本でしょう。そのように、死を見つめる視点というものは様々にあるのです。しかし、現代の日本人は死と向き合う視点がなく、死を無視しているようにも見えます。

この間、浄土真宗本願寺派宗務総長の石上智康氏からご著書をお送り頂きました。それは『生きて死ぬ力』(中央公論新社、二〇一八年)というタイトルの書物です。私は、やっと「死ぬ力」に出会えたという思いで、拝読させていただきました。そこには、これからの話の中心課題でもあります縁起・空という仏教の基本思想に立った念仏への信心が語られています。仏教というのは生老病死と向き合う宗教です。もう少し具体的に言いますと、生老病死に苦悩するその自己とは何者なのか、人間とは何者なのかということを探ねたのが釈尊だと言えます。キリスト教はそうではありません。神によって造られた人間は何をなすべきか、どういう正義を行うべきか、というところにキリスト教の特徴があります。仏教は、何をなすべきかではないです。「自己とは何ぞや」と清沢満之先生がおっしゃっているように、自己への問いが重要です。具体的には、生老病死に苦悩する人間とは何かという問題です。そういうことから出発しているのが、仏教であると思います。

## 釈尊の「縁起の道理」

そういう人間の基本的な問題について、釈尊は生老病死を苦悩とする人間がその苦悩を超えるには、どうしたら良いかと私たちに問題提起をされているわけです。

私はいつもし上げていますが「縁起」ということが重要なのです。釈尊はそういう命への苦悩、生老病死に苦悩する人間の基本的な問題を解決するために「縁起の道理」を発見されたのです。これは皆さまざまご存知だと思います。

私たちはガンジス川の砂の数ほどの因縁によって存在し、因縁が尽きれば、静かに命が終わっていきます。縁起によって成り立っている私であると気づくことが、生老病死の苦悩を超えていく道であると、釈尊は私たちにお教えくださっているのです。言い換えれば、私たちは縁起的存在だということです。これは、仏教の基本的な常識、あるいは、道理、真理なのです。こういうことは、少なくとも明治以後の近代仏教学というものの進歩によって、かなり明確に言えるようになっていきます。

去年のこの讃仰講演会でも申し上げたことで恐縮ですが、因縁によって存在しているものは、その因縁が減していく、必ず寂滅していきます。このことが、釈尊の入滅のときのことを語っている「無常偈」では次のように示されています。

諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅為樂

〈諸行は無常なり 是れ生滅の法なり

生じては滅し、滅し已りて 寂滅を樂と為す〉

〔大般涅槃經〕〔大正藏〕一、二〇四頁下

ここに「寂滅を樂と為す」とあります。科学的な知識を大切にす

る人は、自らの死を絶望の中で迎えなければいけません。しかし、釈尊は「樂」とすると言うのです。

こうしたことは、親鸞聖人にも受け継がれています。「正信偈」の法然上人のお徳をたたえる箇所には次のようにあります。

速入寂靜無為樂 必以信心為能入

〈速やかに寂靜無為の樂に入ることは、必ず信心をもって能入とす、といえり。〉

〔正信偈〕聖典二〇七頁

ここに「寂靜無為の樂」とあります。ここでも、命を終えていくことを「樂」だと言っているのです。私を私たらしめている全ての因縁が消え去って寂靜となることが「樂」だということです。これは他の宗教にはない教えです。

死後に何かを求める宗教と違い、仏教は命を終えていく寂滅のことを「樂」とする「死ぬ力」を私たちにもたらすのです。さまざまな因縁によって、ただいまの瞬間、瞬間があると、そのことに感動をもって深く領くことがなかったら、「寂滅を樂と為す」という「死ぬ力」をもつことはできません。そうした因縁の道理に頭が下がらない人は、死んでいくことは絶望ではないのです。そういう意味で釈尊は、私たちが縁起的存在であるという仏教の真理に立って、私たちが老病死と向き合っていく力を示してくださっているのです。

大乘仏教になりますと、釈尊によって明らかにされた仏教の「縁起」という基本的な真理がさまざまな思想として展開されていきます。最初は、一切の存在は「空」であるという般若思想が説かれます。次に、唯識無境という全ては「識」であるという、唯識思想が説かれます。それからまた、悉有仏性という全ては「仏性を有する」という仏性思想が説かれます。これらは全部、私たちが縁起的存在であるという真理に立って、それが思想化されたものです。

私が学長として大谷大学におりました頃、ドイツのマールブルク大学の神学部の先生方との交流の場がありました。その神学部の先生が大谷大学で講演をされたとき、こういう趣旨のことをおっしゃいました。「鈴木大拙先生の言われる『空』ということや、西谷啓治先生の言われる『無』ということは、神の存在と重なる」と。

その講演をお聞きした後、私は「そういうことであれば、神は縁起的存在となる。因縁によって成り立っている存在となるけれども、そういうことでよろしいでしょうか」とお尋ねしました。そうしたら、その神学部の先生は「縁起であるから、空であり、無である」という原理を知らなかったのでしょうか、私の質問の意味がよく分かっていない仏教の基本的な「縁起」という原理に基づかないで、「空」とか「無」が一人歩きしてしまうと神さまになってしまふのです。そういう危険性は常にあるわけです。ですから、この「縁起」という基本的な真理をしっかりと押さえて、注意深く見ていかなければならないと思います。

このことは浄土思想においても言えることです。本願とか浄土ということをお自分の頭で考えると、特に浄土は、人間に都合のいい、理想の世界のように考えられてしまいます。そういうようにイメージが一人歩きすると、仏教の基本から外れてしまうことになるのではないかと思います。そういうことが、しばしば見受けられます。

### 親鸞聖人の時代

それでは、全ての存在は縁起的存在であるという仏教の真理を、浄土思想、特に親鸞聖人は、どのように明確にされているのでしょ

うか。実は、それが講題に掲げました「仏智不思議の誓願」ということなのです。親鸞聖人は、釈尊によって明らかにされている仏教の真理を「仏智不思議の誓願」として、体系的に押さえておられます。このことを、仏教学という立場からお話したいと思います。

現代であっても多くの人には、漠然とした死への恐れがあるでしょう。しかし、親鸞聖人のご在世の鎌倉時代の頃は、死後が恐れられていました。出家をし、修行をしている僧侶は別として、一般の人たちの多くは、因果応報によって死後には六道に輪廻転生するという考え方を信じていたからです。

因果応報の一番重い罪は殺生です。それは、殺人でなくとも、魚を捕ったり動物を殺したりということなのです。ということは、漁師や猟師の罪が一番重いことになるわけです。そして、死んだら必ず、地獄、餓鬼、畜生という三悪道に墮ちるのではないかと恐れおののいていたのです。親鸞聖人の生きていたのはそういう時代なのです。現在はどうでしょうか。命を終えたら地獄に墮ちると思っている人はどれほどいるでしょうか。死後に餓鬼道に墮ちるかもしれない、畜生道に墮ちて何かの動物に生まれ変わるかもしれないといった恐怖感を抱いている現代人はほとんどいないと思います。

しかし親鸞聖人の時代は、それを恐れ、そうならないように後世を祈る、さまざまな信仰があったのです。親鸞聖人もまた、比叡山で二十年間の学びの後、山を出たので、後世を祈る人びとの仲間になったわけですね。そのことが、恵信尼公のお手紙に書いてあります。

後世を祈らせ給いけるに(中略)後世の助からんずる縁にあいま  
いらせんと(後略) (『恵信尼消息』聖典六一六頁)

ここに見えるように、親鸞聖人も後世を祈ったお一人でした。そして、この文章の後には、「後世の事は、善き人にも悪しきにも、

同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いし」とあります。親鸞聖人はそのように語る法然上人に出遇ったのです。一般の人たちと同じように後世を祈った親鸞聖人は、後世への祈りを超えていく「生死出ずべき道」を法然上人に出遇って確信されたのです。

### 念仏往生の願と必至滅度の願

親鸞聖人の時代であつても現代であつてもそうですが、私たちは、釈尊の説法の肉声を聞くことができません。釈尊は八十歳で入滅されたわけです。しかし釈尊の説法を誓願として、菩薩たちは私たちに伝えようとされたのです。そこに、大乘仏教における菩薩の誓願ということがあるのです。

言い換えれば、釈尊の説法を直接聞けなくなった私たちに對して、釈尊のご説法を誓願の中でお説きくださっているのです。そこに、大乘の菩薩たちの役割があるのです。おそれながらと、釈尊に成り代わって願ってくださいているのです。

とくに浄土經典の場合は、法蔵菩薩の誓願として、私たちに釈尊のご説法が届けられています。ではその誓願をどう受け止めていけば良いのでしょうか。私たちが正依の經典として頂いている『仏説無量寿經』には、四十八願が説かれておりますけれども、親鸞聖人は四十八願の全てを問題にしたわけではないと思います。

私はやはり『教行信証』の所依の本願である真仮八願が基本だと思っています。その中で、親鸞聖人は、仏教の基本的な真理をどこで押さえられたかということは、『浄土三経往生文類』で「大経往生」を述べる次の一文によくあらわれています。

念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。

〔浄土三経往生文類〕聖典四六八頁

ご存じのように「念仏往生の願」というのは第十八願であり、「必至滅度の願」というのは第十一願です。先ほど申しましたように、「必至滅度」というのは、因縁によつて成り立っている私たちが、必ず大涅槃という寂滅に帰していくことです。この二つの願によつて釈尊のお説きになった縁起的存在という仏教の真理が押さえられているのです。

親鸞聖人は、この二つの願文と、それらの願が成就している成就文の両方をしっかりと押さえておられます。このことについては、すでにたびたび申していることですが、念仏往生の願というのは「欲生我国」、すなわち「我が国に生まれんと欲え」という本願からの呼び掛けです。本願からの呼び掛けとは、当然、釈尊の説法であり、それが法蔵菩薩の誓願として説かれているのです。この阿弥陀如来の本願からの呼び掛けとは、言い換えれば、それは「仏に成りたいと欲いなさい」ということです。

一方、念仏往生の願の成就文には「願生彼国」という言葉が出てきます。「欲生我国」という本願からの呼び掛けを受けて、「願生彼国」、「彼の国に生まれんと願ず」と。それは「あなたの国に生まれたいと願う者となります」ということです。それは「仏に成りたいと願う者になります」ということなのです。

そう願う者となった念仏者を親鸞聖人は、必至滅度の願に示される「住定聚」、すなわち正しく「定聚に住する」者と言われます。それは「仏と成るべき身と正しく定まつた者」ということです。それが正定聚の者です。その正定聚の者は、「必至滅度」と言われるように「必ず滅度に至る」のです。滅度に至るとは、大涅槃に至るということです。

このように「念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるな

「至心信樂の願」とは、「念仏往生の願のことです。その至心信樂の願を因として、「等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり」と明示されているのです。これは『浄土三經往生文類』に示されることと同じ内容と言えるでしょう。

本願名号正定業 至心信樂願為因

成等覚証大涅槃 必至滅度願成就

〈本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因とす。等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり。〉

〔正信偈〕聖典二〇四頁

ここに、仏智に出遇った者は、まだ大涅槃には至っていないけれども、まだそうはなっていないという在り方で、現在に、既に到来してきている大涅槃という滅度に至る者となつていふことがよくあらわされています。このように親鸞聖人は、念仏往生の願と必至滅度の願によつて、釈尊の仏教の目的である成仏道を明確に押さえておられるのです。

近年、往生が後世か現世かと分けて論じられていますが、分けられないものなのです。私は「念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり」という関係において、後世か現世かというように分けられない、後世か現世かと分断し分離しない、分断・分離してしまわない、親鸞聖人の成仏道があると頂いています。

### 「縁起の道理」に領くこと

「私たちは縁起的存在である」という道理に領くことは大変です。とくにこれは、欧米の文化圏にいる人にはなかなか了解しえないのではないかと思います。たとえば、私と誰かが出会ったときに、個を前提とする人は、私がいてあなたがいて出会っているという了解になります。しかし仏教では、因縁によつて私たちは存在しているのだから、私を私たらしめている因縁の他に、私という個は単独ではありえないということになります。ですから、私がいてあなたと出会っているのではなく、出会ったことにおいて、私は私となつていて、あなたはあなたとなつていふことです。このことについては、個を大切にする欧米の人はなかなか領けないようです。

かつて、大谷大学で、私が担当する大学院のゼミに、カナダから来た留学生がいました。仏教に関心があつてよく勉強をしていましたが、この人に、このことを了解させるのに一晩かかりました。やっぱり、私がいてあなたがいて出会っているという、その発想から抜け切れないのです。しかしそうではなく、出会ったことによつて、私は私たらしめられているでしょう。私はここで話をしている私しかいないです。それは、皆さまと出会っている中で、話をしている私がいるということなのです。そこにおいてしか、私はあり得ていないのです。

このことについて、龍樹菩薩は「私がいて、あなたがいて、あなたがいて、私がいる。私がいなければ、あなたはいない。あなたがいないければ、私はいない。単独に存在する私はいない。単独に存在するあなたはいない。そのようにして、私とあなたは、現にいま存在している」〔空性七十論〕第一三偈の意訳と説明しています。

お聞きくださっている皆さまも、ここにお座りになつては、私との出会いによつて、お座りになつて居るのです。このよ  
うなことは、日本人の方であれば案外感覚的に分かつてもらえる  
のではないかと思います。しかし「私は」という自己が強い場合、  
その自己がないと言われたら困るのです。「私が、私が」と言つて  
いる個としての「私」は本来的に単独では存在しない、因縁によつ  
てかりそめに因縁のままに私と成っているだけであると言つて  
も、なかなか分かつてもらえません。やっぱり「私」がいないと困  
るのです。

釈尊の時代もそうでした。釈尊の説法を聞いても納得できず、黙つ  
て立ち去つた人がいたのです。仏教の縁起的存在としての「私は空  
である、無である」という教えは、実体としての「私」は何ら存在  
しない、ただ因縁のままにかりそめに「私」は成り立っているに過  
ぎないということです。そこに、確かな個としての「私」がいるわ  
けではないのです。この釈尊の説法を聞いて同意できずに立ち去つ  
た人がいたのです。

因縁のままに、縁起的存在として私は生きて居ることに「そうであ  
つた」と頭が下がつたときには、はじめて仏教徒になるのです。こ  
のことに領けないときは、個としての「私」に立つて、生まれてか  
ら死ぬまで、自分の思い通りに生きようとして、選び続ける人生を  
送らなければならぬということです。最近、安楽死や尊厳死が  
いいとか、死までも自分で決めようとして腕うでが落ちています。

ところが、私たちが縁起的存在であるという釈尊の教えを頂いた  
ときに、選べないものや選べないことを受け入れることができるの  
です。そのことに気づいたときに、選び続ける人生の中にあつて、  
ほのかな光が見えてくるのです。それは選び続けて迷いながら生き  
ている己の姿が見えてくるという光です。

選べないもの、選べないことがある、頑張つたつてできないと

きはできないと、それを受け入れていく大切さが思われます。昔  
の人の方が、そういうことは分かつていたのでしょう。ところが、  
自我に基づく個を大切にする現代人はどうもそれができなくなつ  
てしまつています。そういう現代において、私は仏教というのは、  
非常に大事な問題提起ができるのではないかと思うのです。

### 「縁起の道理」と親鸞聖人

この縁起の道理に領くことを、親鸞聖人は和讃では次のように述  
べておられます。

仏智不思議を信ずれば しょうじょうじゆ 正定聚にこそ住しけれ

化生けしやうのひとは智慧すぐれ 無上むじやうかく覚をぞさとりける

〔正像末和讃〕聖典五〇四頁

ここに「仏智不思議を信ずれば」と述べられています。釈尊から  
直接説法を聞くことができなくなつた私だけでも、その説法を本  
願としてお聞きくださつて居る。その本願を信じる者となろう。そ  
れが「仏智不思議を信ずれば」ということです。

この「仏智」というのは、最初に申しましたように、私たちは縁  
起的存在であり、必ず大涅槃へと至つていく身である、そしてそ  
れを「楽」とするという智慧です。仏智不思議を信じることによつ  
て、正定聚に住するのですが、親鸞聖人は、この正定聚の人につ  
いて「化生のひとは智慧すぐれ」と言われています。この「化生」  
については、たとえば、すべての存在の本質は実在すると説くア  
ピダルマ仏教において、胎生、卵生、湿生、化生という四生が説  
かれて居ます。その中の化生については、中有とか地獄などの有  
情のように「忽然として生ずる」と説明されています。しかし、こ

ここで説かれている「化生」とは「化縁すでにつきぬれば 浄土にかえりたまいにき」(『高僧和讃』源空讃、聖典四九九頁)と和讃されていますように、私としては、「私たちは縁起的存在である」「因縁によって生まれる」という無生の生・因縁生のことを指していることを受け止めています。

そのように「私」が因縁によって存在しているということに頭が下がった人は、智慧がすぐれ、無上覚、すなわち釈尊の無上なる覺りをさとり、浄土(大涅槃の世界)にかえるのであると、親鸞聖人は述べておられるのです。

あるいは、曇鸞大師の言葉によりながら作られた親鸞聖人の和讃には次のようにあります。

いつつの不思議をとくなかに 仏法不思議にしくぞなき

仏法不思議ということ 弥陀の弘誓になづけたり

(『高僧和讃』曇鸞讃、聖典四九二頁)

この和讃においても、親鸞聖人は、釈尊のお説きになった仏法不思議は、弥陀の本願の誓願となつていと、受け止めておられます。

確かにここには、近代仏教学の中で明らかになったような、縁起的存在に目覚めるといふような基本的な原理についての説明はありません。しかし私は、ここで言われる「仏智」という言葉がそのことを意味していると思います。本願を信じ、仏に成りたいと願った者は、仏智に出遇っている者であり、無上なる大涅槃の世界に必ず帰らせてもらうのです。そのことを私たちに、絶えず問い掛けてくださっているのが仏智なのです。

そうしますと、仏智は私たちを照らすものということになります。それは次の「正信偈」の一節にもよくあらわれています。

煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

〈煩惱、眼を障えて見たてまつらずといえども、

大悲倦きことなく、常に我を照らしたまう、といえり。〉

(『正信偈』聖典二〇七頁)

この和讃の中に、仏智のはたらきである大悲が常に私を照らしてくださっていると示されています。

また親鸞聖人は、仏智のはたらきを「撰取不捨」と頂いておられます。それは、次の和讃にあらわされています。

弥陀の本願信ずべし 本願信するひとはみな

撰取不捨の利益にて 無上覚をばさとるなり

(『正像末和讃』聖典五〇〇頁)

ここに示される「撰取不捨の利益」、つまり撰め取って捨てないという利益は、仏智のはたらきのことを言っているのです。その仏智を、本願を通して信じるということです。

この「撰取不捨」は、『教行信証』「総序」の中では「撰取不捨の真言(聖典一五〇頁)と示され、『浄土文類聚鈔』の中では「撰取不捨の真理(聖典四〇九頁)と示されています。撰取不捨ということは、真言であり、真理なのです。それは、因縁所生に目覚めた者は、必ず大涅槃の寂滅・滅度に至らしめられるのであるという真言、真理なのです。

この真言、真理というのは、釈尊の縁起的存在という真理に重なっていくわけです。これは、仏智の側から私たちを撰め取って捨てないと照らし出してくださる真理です。そしてその大悲に照らし出される側にひとすじにお立ちになられたのが親鸞聖人です。そこに、仏智は不思議であるという受け取りがあるのです。



## おわりに——仏智に照らされる

この仏智の道理に頷かれたのは、なにも親鸞聖人お一人だけのことではありません。たとえば近代以降のことで言えば、鈴木大拙先生がおられます。鈴木先生は、お若いときから禅に励まれて、禅宗における悟りを体現した人です。仏智に立った人なのです。ご存じのように、鈴木先生は、国から文化勲章をもらったり、昭和天皇の前で仏教の講義をしたりして、その講義の内容が『仏教の大意』として出版されています。釈尊も、マガタ国の頻婆娑羅王に説教したと伝えられています。そういう意味では、鈴木先生は現代の釈尊と言ってもいいと思います。

昭和十九(一九四四)年に『日本の靈性』という有名な書物が出版されました。ここでは、知的な面としては禅宗で、情的な面としては法然上人と親鸞聖人のお二人の浄土教で、仏教を押さえています。なぜ、敗戦直前のときに『日本の靈性』という書物が出版されたのでしょうか。それは、当時、戦前・戦中時代は、日本人は特別に優れた民族であって、天皇の大いなる御心を世界の人たちに広めていくのだという、いわゆる日本主義を批判しようとしたからであると思います。もちろん、まともに批判したら捕まって投獄されてしまいますので、鈴木先生は、それを直接的に批判せずに、『日本の靈性』として間接的に批判されたのではないかと思います。「靈性」というのは、言い換えれば、宗教精神とも言えるでしょう。日本の宗教精神とは何かということを示されたのが、『日本の靈性』という書物だと思っています。

その鈴木先生は、釈尊と同じように、仏智で照らす側に立った人です。鈴木先生は、「四弘誓願」の最初の「衆生無辺誓願度」(衆生のすべてを済度しよう)と誓願するを大切にされていたようです。一方、親鸞聖人は、仏智に照らされる側に立たれた人です。そこに「愚禿

親鸞」という名があります。決して仏智で照らす側に立たれたのではなく、仏智によって照らされる側に常に入った、それが親鸞聖人のお立場だったと思います。だから「仏智」を「不思議」として頂かれたのです。

仏智に立った人からすれば仏智は不思議ではなく当たり前です。だから、鈴木大拙先生にとつて、仏智のはたらきは当たり前前の道理です。それが「撰取不捨」の利益であり真理なのです。

ところが、仏智に照らされる側に生涯お立ちになった親鸞聖人は、誓願を道理として押さえながら、それを「仏智不思議」として信じるのです。それが、親鸞聖人のお立場だったと私は思います。

仏智をもって照らす側に立つとき、仏智は撰取不捨のはたらきとなり、仏智によって照らされる側に立つとき、仏智は不思議としてはたらくのです。

私たちは死を嫌います。できるだけ長生きしたいとも思います。だけれども、釈尊に縁起的存在であることを教えられるとき、死を遠ざけ、死に絶望することのない「寂滅を樂と為す」という世界に身を置くことができるのです。それこそが、仏法に領いた者の「死ぬ力」ではないかと思えます。そうしたことを親鸞聖人の「仏智不思議の誓願」という言葉によりながらお話させて頂きました。時間が参りましたのでここで終えさせて頂きます。ありがとうございます。

(おがわ いちじょう)

二〇一八年十一月二十六日  
親鸞聖人讃仰講演会抄録

# 聞

## 恩徳への讃嘆―祖母の姿勢―

教学研究所助手 松金 直美

先日、母方の祖母が九十一歳で亡くなりました。お西（浄土真宗本願寺派）の寺で生まれ、お西の寺に嫁いだ祖母に、私は大変可愛がられました。もぐり姿で遠くのご門徒宅へも寺役参りに歩いて赴く祖母のお供を、幼い私は時々していました。

祖母の生活は、常に阿弥陀さん中心でした。いただき物は、真つ先にお御堂にお供えしていただきました。そしてお参りの時には、ご本尊である阿弥陀さんの前だけでなく、祖師前御代前、さらに二カ所の余間と、必ず五カ所に座ります。一つ一つの姿を、幼い私は一生懸命まねをしていました。

祖母とは幾度となく恩徳讃を一緒に歌いました。親鸞聖人の和讃に曲を付けた恩徳讃には、よく知られたものとして二種類の曲があります。お西では軽快な曲調（恩徳讃Ⅰ）の方でよく歌われますが、お東（真宗大谷派）では落ち着いた曲調（恩徳讃Ⅱ）で歌う機会が多いです。まず作曲されたのは落ち着いた曲調で、大正七年（一九一八）に新築されたお西のハワイ別院での法要にあわせて、ハワイ別院に赴任した澤康雄氏によって作られました。その後、戦後になってからお東の寺院出身者である清水脩氏が軽快で明るい曲調で作曲しました。ただ高倉会館にはじまり、現在はいらん交流館で続いているお東の日曜講演では、清水氏作曲の節で歌い継がれています。

私はお東のお寺に生まれ育ちましたが、軽快な

曲調の方が好きだったこともあり、祖母とは清水氏作曲のメロディで、よく一緒に歌いました。今思えば、朗らかで明るい祖母の性格と恩徳への讃嘆が身に備わっている祖母の姿をそのまま表しかのような歌に思えます。

晩年の祖母は認知症が進んでいきました。そうになると、日頃からのこだわりが、はつきりと出てきます。祖母のこだわりは大きく二つありました。一つはファッションです。祖母は元気な頃、毎日、着物を着て生活していました。普段着が着物です。そしてお出かけする時、ワンピースを着ていました。おしゃれで素敵だな、と私のあこがれでした。病気や認知症が進んでからは、洋服を日々着ていましたが、お気に入りの白いカーディガンがない、と不安がっていたこともありました。

もう一つのこだわりが真宗です。生活の中に仏法が息づいていました。ある時、何度も確認されたのが、私の実家である寺院の報恩講がいつかという事です。何度もたずねてくるので「ぜひお参りに来てね」と伝えると、祖母には心配事があるようでよいか。そして、報恩講へお参りに行く際、青い着物を着て行くのだ、と言っていました。実際に、青い着物を着てお参りに来てくれたのですが、お気に入りの着物を身正して報恩講へお参りすることが、お念仏の教えに生きた祖母の譲れない姿勢であったのではないかと思います。仏法にふれる生活の中で、仕事をしながら身形にも気を使った一人の女性として歩んでいた祖母は、あこがれの存在でした。常に、如来大悲・師主知識の恩徳への報謝の念を忘れず、日々の生活で讃嘆し続けたのが、祖母の姿勢でした。

### 今後の予定

▼東本願寺日曜講演▲（開会 午前九時三十分）

会場 しんらん交流館2階 大谷ホール

京都市下京区上柳町一九九 東本願寺北側

六月二日「弥陀の本願信ずべし」

―凡夫の身にひらかれる魂―

名古屋教区恵林寺 荒山 信

六月九日「倫理が歩みを止めるところ」

大谷大学名誉教授 池上 哲司

六月十六日「何を拠る所に、この社会の現実と向き合って生きるのか」

名古屋大学名誉教授 藤元 雅文

六月二十三日「親鸞聖人における「悲」の理解」

大谷大学准教授 藤元 雅文

六月三十日「母に学ぶ。介護の心得と作法13カ条」

淑徳大学客員教授 藤腹 明子

七月七日 山陽教区光明寺 元教学研究所長 玉光 順正

七月十四日（休会）

七月二十一日 元教学研究所長 西田 真因

七月二十八日 金沢教区幸圓寺 幸村 明

### ▼高倉同朋の会▲

日時 六月二十六日（水）午後六時三十分より

場所 しんらん交流館1階 すみれの間

講師 名和 達宣（教学研究所研究員）

テキスト 唯信鈔

会費 一回五百円

\* \* \*

お問い合わせ先

『ともしび』の内容、「高倉同朋の会」について

教学研究所 〇七五―三七七―一八七五〇

『ともしび』の申し込み・支払い・発送について

東本願寺出版 〇七五―一三七七―一九一八九